

ICOT Technical Memorandum: TM-0932

TM-0932

発話意図と疑問の焦点

佐野 洋, 福本文代

July, 1990

©1990, ICOT

ICOT

Mita Kokusai Bldg. 21F
4-28 Mita 1-Chome
Minato-ku Tokyo 108 Japan

(03) 456-3191-5
Telex ICOT J32964

Institute for New Generation Computer Technology

発話意図と疑問の焦点 Communicative Intentions and Focus on the Interrogative in Japanese

佐野 洋 福本 文代

SANO, Hiroshi FUKUMOTO, Fumiyo

(財) 新世代コンピュータ技術開発機構

INSTITUTE FOR NEW GENERATION COMPUTER TECHNOLOGY (ICOT)

E-mail : sano@icot.or.jp

はじめに

ことばを使った伝達行為の目的は多岐に亘るけれども譲与などのように具体的な対象物の移動がない。伝達の対象は極めて抽象的であって、その内容は他者の介在を認めない主体自身の思考内容であるけれども、その内容の発話時には聞き手を含む場に拘束される。主体の意図の統制の下で表現内容は発話の態度に支配される。例えば、金品の受授の行為が終了した後、参与した者の間には絶対的な量的差異が生じる。ことばの伝達の場合は伝達に与る思考の内容は、相手に伝わった後でさえ依然として消えることはない。この顕然としたことばの伝達の性質は、共通の了解事項である以上に疑問文の運用を基本的に支援する。

言語の基本的な性質が情報の伝達にあることを我々は暗黙に認めている。とすれば、情報の伝達を積極的に促す要求表現も言語の中核に位置する現象であろう。コミュニケーションの場においては疑問文や質問文の占める役割は大きい、という常套語の存在は安易に推知できる。言語学の計量的側面を中心とした探究領域の多様化は目を見はるものがあるが、言語の内部の分析に終始するところがある。とりわけ自然言語の分析の方法は、情報の伝達の側面に力点を置いていたのではないか。疑問文や質問文は、一応、何々文と名づけられている。しかし、これらの意味は文法規則のように規則化することが難しく、計算言語学に立脚点を置くとその扱いは、狭義の質問表現にその分析対象が限られている。

さて、形態論は文法学の一部門であり、語の構成にかかわる諸現象を扱う。語構成にもコミュニケーションの場の特徴は影響を与えている。伝達の周辺に位置する疎通と通信は、コミュニケーションの場に与る対象物のふる舞いを特徴づける。表1は、語構成例であるが、伝達対象は伝播した後には量的変化を及ぼすものと、共有したり認識する類のものがあることがわかる。いわゆる叙述内容に何がしかの不定項目があり叙述の確定が可能でないとき情報が受授の対象となる。これが問い掛けの態度と結びつき狭義の質問文となる。叙述の確定と不確定のはざまには推定とか推量が判断基準として存在する。これらのムード要素は、確認や念押しといった疑問文を形成する。意志が伝達できる以上、その要求が可能である。主体の意志は心的態度にか

かわるもので、コミュニケーションの場の中で感情表現も担う。尚、表明は、コミュニケーションという場の構成とその運用に係わる。

表 1: 語彙構成

	伝達	疎通	通信	表明
思考	*	*	*	*
情報	情報伝達	*	情報通信	*
意志	意志伝達	意志疎通	*	意志表明
態度	*	*	*	態度表明

発話はコミュニケーションの場において、文章は文脈に支援されて文の意味が決定する。本稿では、話者の意図を積極的に導入することで統語論的アプローチから意志を扱い疑問表現の特質を述べる。意志と情報に関して統語論的な形をもとに分析にあたり、語用論的な分析モデルを持ち込むことで疑問文における意志の機能を説明する。本稿はその形式化による疑問表現の基礎的考察である。

1 アプローチ

仮に多くの選択肢を不問とし情報要求の意図に限っての疑問文の分析であっても、入力が形態列にのみ依存するため、これまでの諸々のシステムは音調や発話片に依存する現象には極めて脆弱であった。疑問文の類型には、形態上で区分することなく依頼や提案の意味を持ったり、話者の判断に深くかわる機能を持つこともある。分析の及ぶ範囲が、狭義の質問文であったため、疑問表現において多用される形態上の指標「かしら」「かなあ」がなおざりにされてきた。「のか」「ですか」「ますか」といった、事態表示機能を持つ形態素と「か」の顕在化についても記述が不足し、疑問詞と「か」の相関にばかり言及が集中している。文法書の多くは、その記述が品詞論や活用論に終始することが多く、疑問表現については比較的注目の度合いが少なかった。

疑問の文型の類型分析については、[15]や[11]に詳しく述べられている。狭義の質問文の叙述内容に対する分析

は、中右 [9] において英語との対比をもって示される。中田 [10] は、叙述内容と疑問の焦点のおかれる範囲についての言及をおこなった。

文法部門に属する統語分析や意味分析からのアプローチに対して、日本語教育の中でコミュニケーション機能からの疑問表現についての考察を斎藤 [3] が報告している。斎藤は、[3] の中で、疑問文や質問文のコミュニケーション上の機能を一覧として掲げている。これは実際の運用の場において収集された資料であり貴重である以上に多くの示唆を含む。コミュニケーション上の働きの中では、疑問表現は実に多種の機能をもつことを、この一覧表は伝えている。いわゆる情報を要求のためにつかわれる意味が、一部を占めるにすぎないことを示している。さらに、斎藤は日本語教育における題材の課題の一つとして「場面設定として、学習者が他者の質問に答える受け身な場面の頻度は高いが、学習者が質問をしたり、話題を提示したりする主体的なコミュニケーションの場面が少ない」ことを挙げている。これまでの対話システムの多くが受動的な情報提供者としての振るまいでしか機能できないことと同種の問題を抱えるようである。機械システムが持つべきコミュニケーション機能の性質を考える上で多くの例示があるようだ。

計算言語学からの提案は wh-movement やギャップとしての扱いとして理論言語学によることが多い。不定項目の特定は叙述内容、いわゆる命題部分にとどまり意志の疑問の扱いは稀である。質問の文中において疑問の焦点を探る試みが林 [6] にある。語用論的アプローチの一つに前提と変項の導入により疑問文を分析する方法が見られる。発話中の前提とその所属主体を求める試みを吉本 [19] が行っている。佐野 [5] は、述部の階層分析を基にし述部にその外形形態が明解に現れるモードとの関連において疑問文の持つ統語特徴を述べるとともに単一化の枠組での分析方法を提案した。問われている部分を明示するため疑問の焦点とその範囲を示す要素を統語分析のために導入したものである。狭義の質問文の統語上の所属位置を提案したもののだが、その統語制約の形式化は不十分であり現象の多くを処理枠組の外に残している。

疑問詞の類在と終助詞「か」の付与といった形態特徴をもとに、狭義の質問文は一般疑問文と特殊疑問文に区分され、付加疑問、あるいは反響疑問といった機能への言及がみられる。しかしながら、上述の分析は日本語の疑問表現に対しては守備範囲が狭い。本稿でのアプローチは、疑問詞や「か」といった形態特徴と述部の階層分析 [4] とを融合した点にある。述部階層分析は文の意味的な基準による文の統語分析である。従って、疑問表現のもつ形態特徴を述部階層分析にあてがうことで、不整合部分を少なくしつつ意味上の取扱いへと分析範囲を輕易に広げることができる。そうして、コミュニケーションの場における主体の意志を考慮した疑問文の機能を述べる。この処理過程は、言語的な知識にもとづく理解であるので、広範な言語理解の意味での疑問表現理解ではない。言語外知識や背景知識や文脈情報を用いなければ、もちろん発話の完全な理解はないことは周知のことである。

まず文の叙述により得られる述部構造を示し話者の意志が現れる層を提示する。述部階層構造と叙述の相関ならびに意図部分との相関を示し、幾多の特徴的な統語制約があることを述べる。次に発話行為の面から捉えた意図の構造

を提案する。発話行為の場を設定し、その中で主体の意図と疑問表現の統語特徴とそのふるまいを形式化する。

2 文型分類

2.1 述部形態と文の基本的な類型

述部形態と述部階層分析との相関を示すために文型を提示する。一般に文型は文の統語論的な類型を指す場合が多く、具体的には個々の文を相似点によりまとめることにある。ある基準を設定しその基準に照らし類型化を試みたものである。統語論的な文分析の基礎となるわけだが、多様な観点から数多の文の類型といわれるものが提示されている [16]。類型化の観点はさまざまであり [16] では、次の2例を挙げる。

- 統語文型 構成要素の配列やその構成関係により統語構造の類型を求め、次いで各類型ごとの意味づけを行う
- 意味文型 表現内容の意味的な区分類型を立て、それらに統語上の構成関係を与える

コミュニケーションの過程は、まず伝達内容が記号化され、それら記号があるコード体系に沿って伝達されて相手によって同コード体系により解釈されることである。記号列だけを扱う場合の困難の多くは、文が同一の型で異種の意味を示すことにあろう。言語学に関する研究が指摘するように、同形態で異義を示し同義のことを異形態をもって表現する。これは厄介な現象であろうか。理想的な伝達においては、多くの情報が正確に伝わる。コミュニケーションの効率から言えば伝達に要する量が少ないほど効率は向上する。発話ではコミュニケーションの場であり文章では文脈を背後に持つ意味内容は、その違いを示すために形態区分や統語差異を要求しない。

本稿では、構文の違いや語の形態変化といった統語特徴から、文に固有の外形と、外形が示す第一義の静的な意味で区分する。静的であることは、発話の場や文脈に依存しないことである。このような観点に立つと、日本語の文型分類は、概ね表2のようになる [4]。表中の*は中立的で本来的な意味での基本類型であることを示す。

表2: 文の基本類型

1 (平叙文)	$\left(* \left[\begin{array}{l} \text{ル形(スル)} \\ \text{タ形(シタ)} \end{array} \right] \right)$
2 (推量文)	$\left(* \left[\begin{array}{l} \text{ル形(スルダロウ)} \\ \text{タ形(シタダロウ)} \end{array} \right] \right)$
3 意志文	$\left[\begin{array}{l} \text{肯定形(シヨウ)} \\ \text{否定形(シマイ(, ヌ))} \end{array} \right]$
4 命令文	$\left[\begin{array}{l} \text{肯定形(シロ)} \\ \text{否定形(スルナ)} \end{array} \right]$

個々の文は、構文や形態変化で特徴づけられる外形を伴って、それに応じた意味を表す。意味の多様性は、まず文の類型に特徴づけられる。既に述べたように伝達の効率面から、記号(ことばの形)は必ずしも記号内容(ことばの意味)を対応関係をもって表さないが、形と意味の基本的

な対応の体系は存在している。表2は述語の外形特徴と意味を相関させた文の基本類型である。

2.2 統語構造表示

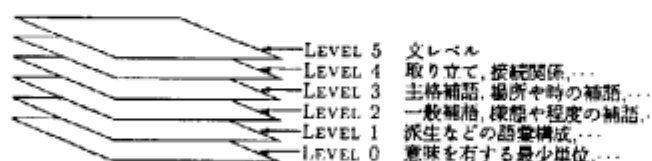
この基本類型は文の意味的な形態特徴をもとにしている。文を構造的に捉えていて特定の統語構造を仮定する。統語構造表示は、述部階層分析[4]に従い次のようになる。尚、紙面構成の関係から事態部分は分けて示した。

表3: 統語構造表示

* 5	[	ムード◇	]	[	評価 文問関係 提題 * 4	(事態◇)	]
事態	[	事態間関係◇ 時間、場所副詞◇ 主格補語◇ * 否定 アスペクト テンス 3	]	[	様態、程度◇ 一般補語◇ ヲ格補語◇ * 2	(用言)	]
用言	[	* 1	]	[	述語 * 1	[	派生 0

これは、文を階層表示したもので、その概念図を図1に示す。表3中の数値がLEVELに相当する。*はネストする構造を示す。

図1: 述部概念図



2.3 発話行為表示

一般的に、発話行為は、時間的、空間的な場において話し手を軸に行われる。コミュニケーションの場には複数の

主体が存在しながらも自己中心的である。自動性文脈では、叙述に主体が顕在しないが、叙述の行為は主体に属するものである。さらに叙述することは叙述態度、すなわち主体の意志に依存している。次の例では、自動性の文と他動性の文の比較である。「質草が流れる」と叙述した主体は存在するわけで、主体が質草に関係している場合には、彼の経済上の状態を推しはかれる。読みの可能性として質流れを客観的に叙述し、主体と質草との直接関係が認められない場合がある。他方、他動性の文では、積極的な主体の事態への関与がある。

- (1)「質草が流れた」
- (2)「質草を流した」

我々が提示する発話行為表示では、常に主体の存在を仮定する。基本類型分析が顕在する形態を基準にしているのに対し、この表示レベルは認識上の扱いになる。本稿で提示する発話の構造を表4で示す。*は統語構造表示全体を示す。

表4: 発話行為表示

[	発話者 発話態度 文 時間 場所 聞き手	[	主体 主題 * (叙述)	]

コミュニケーションの場では聞き手の知識状態を仮定する。これには、これまでに構成された文脈も含まれ、発話の意図は、その時点での聞き手の知識状態だけでなく認識状態にも影響される。また、社会的な要因、基本には協調的に会話の展開が円滑に進むよう意図される。その中で、疑問表現は円滑なコミュニケーションを妨げる障害に起因する。

本稿の目的は、それらを解消する意図はどのようなものかを言語表現を基に解釈する試みである。これらの要因を、形態特徴や、特に統語構造表示の中に求めるものである。疑問表現という言語表現の意味を特定したり、適切性を判断する要因は、発話の前提として、文章であれば文脈を、コミュニケーションであれば発話の場を作りあげ、成り立たせる要因である。言語表現を基にした分析では次のような要因がかかわる[17]。

- 叙述内容の成否、存在の有無
- 主題化と前提
- 人称制限
- 叙述態度の発話の意図の関係

狭義の質問文では、特に第一の点と密接にかかわる。叙述した事態内容の成否と問うことは、聞き手の知識内容

に、その存在を仮定している。主題化は共有する対象物をもつこと、前提は情報の有ること仮定する。たとえ、共有する対象物をコミュニケーションの場で持ったとしても、前提によって表現の適格性が違ってくる。

次の例文は、発話者と聞き手の双方の視界に娘さんが存在していてコミュニケーションの場に共有していても、聞き手に娘さんに関する情報がなければ、第一の疑問文は発話されない。第二の疑問文が可能なのは、確定情報の要求ではなくて聞き手の判断を求めているのである。意志を指向したものであり、相手の推断にもとづく応答であることを了解していて、前提が発話者の意図に関係している例である。

- (3)「あの娘さんはやさしいのですか」
(4)「あの娘さんはやさしいのだろうか」

人称制限は形態特徴に顕在化する。平叙文の現在形、完了形ともに一人称が格は自己感情の表現、あるいは強い反語などの特殊な状況を求める表現であり、一般的な文としての適格性は下がる。

- (5)「私が酒を飲む」-「私が酒を飲むか」
(6)「私が酒を飲んだ」-「私が酒を飲んだか」

叙述態度はこれら主体者の人称と基本類型と密接に関係していて、疑問化をおこなう際に発話意図と関連する。以下では、基本類型を中心に基本類型上、統語構造表示上の制約とそれらの相関について考察する。

3 疑問化の統語制約

本節では、先に示した文の基本類型をもとにして疑問文の形成が主体意志とどのように結び付くかを観察する。前節に示した類型分析と扱いのモデルは、文が叙述内容とそれを包括する叙述態度の構成体であることを観点に据える。叙述態度は狭義の意志であり、話者の意志なくしては文は成り立たないことを仮定している。この基本文類型に疑問表現を相関させるのであるが、統語論上の分析を試みる前にいわゆる疑問文の形態特徴を述べておく。

3.1 疑問文の形態

疑問文の形式をもって示される意味は、狭義の質問の意味を初め、依頼、勧誘や自らの態度表出である詠嘆、強調など多岐に亘る。これらのことから文型として類を立てることはできないだろう。意味の多様性に比して形態特徴は簡明であるようだ。大雑把にいうと、主節の末尾に「疑い」を示す「か」が付与される。疑問詞と呼ばれる一群の語と共に起る上述の「か」の存在である。「のか」「ですか」に見られるように叙述内容を明示する形態が「か」前接することがみられる。「の」末尾への付与により疑問を表現する。体言には「なの」が接続する。念押し「のね」による意志確認は疑問表現に属する。「かしら」「かな」という疑いを示す形態付与により疑問文を形成する。形態には現れないがイントネーションは上昇調でも下降調でも使われる。

述語の外形特徴と意味を相関させた文の基本類型である

表2は、主体の意志をその類型化の観点としている。代表的な疑問化形態の付与による疑問化を表5に示す。

基本類型1の平叙文は、確定的な意味で事態を叙述する。ノカの付与が許されていることは、事態の包括的な確定力がこの類型に弱いことを示している。ノによる事態の確定があり、力により、疑いのムードを示すと同時に、聞き手に当該事態に対し不明部分の解消を求めている。一方で、ノによる疑問化形態があることも、終助詞、あるいはそれに準ずることばに依存して断定、感嘆などの事態の確定性を強くすることの現れである。基本類型2と3は仁田[12]のいう真性モダリティーであり、ムード部分を明示するノカやノの形態をとらない。意志文についても、ほぼ同様である。この類型1と2の差は、次項で述べる人称制限として現れる。意志文のシヨウに対してカシラが付与されているが、意志の強さを可変とする役割をもつようである。命令文では、二人称制限のもとに疑問形態をつくらない。疑問形態が本来「疑い」を基本としているためで、確定した叙述内容の依頼表現とは対立する。

表5: 基本類型と形態制限

基本類型	形態	疑問化形態			
		カ	ノカ	ノ	カシラ
平叙文	スル	○	○	○	○
	シタ	○	○	○	○
推量文	スルダロウ	○	-	-	-
	シタダロウ	○	-	-	-
意志文	シヨウ	○	-	-	○
	シマイ(,セヌ)	○	-	-	-
命令文	シロ	-	-	-	-
	スルナ	-	-	-	-

3.2 統語構造表示における疑問の焦点

疑問表現は、叙述の内容に確定的判断ができなくなり、「疑い」の様相を抱くことで発話される。統語構造上、不明点が出現する潜在的な位置は特定が可能である。先に示した表3の統語構造表示において、菱形で示した部分に疑問の焦点は置かれる。事態間関係において菱形を小さく示したのは、主節の事態成立の理由に疑いがあるものと、条件に疑いがあるもの2種類に限られるためである。事態間関係には、時間順序関係や並立関係があり、常に焦点が置かれるわけではない。事態間関係の焦点化の可能性は、前提を疑問視することにより行われている。以下の表は主体の心的状態と焦点可能化位置を示したものである。

表6は狭義の質問文における焦点可能位置を示したもので、発話者は聞き手において事態が認定されていることが仮定されている。「知らない」「わからない」といった返答によって、発話者は不明の情報の解消が未遂に終わることになるが、聞き手の情報量についての知識を新たに得る。

表 6: 事態内焦点化潜在位置

焦点化条件	統語要素	形態
主体が事態の成立を認可	ヲ格補語 一般補語 主格補語 様態, 程度 時, 場所	疑問詞

表 7 では、事態の成立を認めてはいるが、成立の条件や理由に「疑い」を抱いている場合を示す。疑問詞は「なぜ」や「どうして」であるが、後者の「どうして」は事態内の不定部分の焦点化にも使われる。

(7) 「どうして見るのか」

例では、見るという事態の成立の条件に疑いがある場合と、事態の成立の様態に疑いがある場合がある。基本類型 1 に限られる用法である。

表 7: 事態内焦点化潜在位置

焦点化条件	統語要素	形態
主体が事態の成立を認可	事態成立の条件 事態成立の理由	疑問詞

事態成立の真偽を問う疑問表現を、表 8 に示す。日本語では、否定を含む全体事態がその真偽の対象となる。事態の範囲に否定を含むかどうかは、応答文における「はい」「いいえ」の使用の仕方を左右する。

表 8: 事態内焦点化潜在位置

焦点化条件	統語要素	形態
主体が事態を確定できない	事態	文末の疑問化

統語構造表示の LEVEL 4 に位置するムードは推量、判断、意志などにかかわり基本類型で示した形態と相関を持つ。ここが焦点化される際には、事態の成立が、自らの意志決定だけで認可できないことを示す。複数の主体の認定のもとである事態が成立する。表 9 は、ムードに焦点がある際の疑問表現と主体意志と発話第 2 の関係である。聞き手に認定の意志を求める場合には、確認や許可の表現を取り、自らの認定の意志を提示する場合には、依頼、勧誘の表現となる。

認定される事態が、広く一般的なもの、あるいは複数主体者間で認定されていることが既に了解されているような場合には、主体者の意志の伝達だけが行われる。表 10 にその特徴を示す。他動性の文では、主体と事態を統語構造表示にから求めることが可能である。さらに、主体者の意図は基本類型によりその基本的な区分が得られる。主体者と話者との関連は発話態度に依存していて、発話の前提条件に依存して決まると言えよう。一方、自動性の文では主体

が統語構造表示によっては顕在化しない。しかしながら、主体と発話者は異なることがない。ほぼ、発話の態度は主体者の態度と一致する。

表 9: ムード焦点化潜在位置 1

焦点化条件	統語要素	形態
複数主体が事態の成立を認定	ムード	基本類型 1+ カ 基本類型 2+ カ

下位区分	
意志の区分	態度の類型
発話者が事態成立を認定	確認, 許可
発話者が事態成立を推定	依頼, 勧誘

表 10: ムード焦点化潜在位置 2

焦点化条件	統語要素	形態
複数主体が事態の成立を認定	ムード	基本類型 1+ カ 基本類型 2+ カ

下位区分	
意志の区分	態度の類型
発話者が事態に対する判断を伝達	意志伝達
発話者が事態に対する判断を要求	意志要求

3.3 文型分類と統語制約

疑問の焦点化には、主体者の事態の認定の態度がかかわることを前節で述べた。統語構造表示では、主格補語に統語上の特定の機能を認めている。そして、発話行為表示のモデルでは、さらに主体の存在を仮定した。これは、認識的に事態を把握するのは主体であることと、疑問表現において、発話者の態度、すなわち聞き手に問い掛ける性質がコミュニケーションの場において疑問表現を疑問文たらしめると思われるからである。

疑問表現における主体の人称制限を観察する前に、文型類型とその人称制限を表 11 に示す。

表 11: 基本類型と人称制限

基本類型	人称	形態
平叙文	1 2 3	スル
	1 2 3	シタ
推量文	1 2 3	スルダロウ
	1 2 3	シタダロウ
意志文	1 * *	シヨウ
	1 2 3	シマイ (, セヌ)
命令文	* 2 *	シロ
	* 2 *	スルナ

意志文、命令文に人称制限がある。疑問表現は、「疑い」部分の焦点化によって聞き手に要求する情報を提示する。主体者の事態の認識の仕方にかかわり問い掛ける性質を有した場合、それは発話者の態度に現れる。すなわち、前提とする聞き手の知識状態によって表現は変化するのである。焦点化と前提という要因は、主題化に結びつくことが予想される。

文は新情報と旧情報に区分されるといわれる。具体的な表示手段は、ハとガによるマークの仕方の違いや語順配列の違いなどによって示されるほか、「ならば(たら)」などの条件節の明示にその手段がある。疑問化表現のうち「カ」について主題化し主格とガ格でマークされた主格の人称制限についての制約を述べる。

表12はガ格でマークされた主格と疑問化表現の人称制限を示した。

表12: 疑問化と人称制限1

基本類型	人称	形態
平叙文	* 2 3	スル (ノ)カ
	1 2 3	シタ (ノ)カ
推量文	1 2 3	スルダロウ カ
	1 2 3	シタダロウ カ
意志文	1 * *	シヨウ カ
	* * *	シマイ (、セヌ) カ
命令文	- - -	シロ -
	- - -	スルナ -

箱形で囲われた人称においては、問い掛ける性質が弱く反語の意味を持つ。特に一人称ガ格は、自らが主体となる事態の認定を疑うことを表明することになる。これは、基本的に問い掛ける疑問表現にはなり得ないものであり、不満や詰問など自己の感情の表現に使われる。つまり、自らが主体となる事態に対して成立を疑うことで、逆に成立の確からしさを強く聞き手に述べる。

(8)「私が援助するのか」(「いや、しない」)

(9)「私がそう言わなかったか」(「言ったはずだ」)

基本類型2では、推量表現が疑問化したもので三人称に制限される。一人称、二人称の使用は従属節に同じ人称で示される主体が関与する仮説的な事態が明示されることで認可される。または、仮説的な状況が文脈中に現れることを前提とする。

表13は主題化した人称制限を示した。基本類型1では、一人称主格が主題化されるとクイズ疑問の読みとなる。完了形においては、記憶の喪失により自らが主体者となった事態について不明点を聞き手に問い掛ける意味である。前者は発話者と聞き手の知識状態の関係により適格性が問われる。クイズ疑問は、言表の事態に関する発話者の知識量が明らかに聞き手のそれを上回る。後者は文脈あるいはコミュニケーションの場の支持が必要である。

基本類型2については、仮説的状況を持ち込むことはガ格でマークされた主格の場合と同様である。意志文による主題化した一人称主格は、事態の成否を問う疑問表現は作

れない。以下の例にあるように、必ず、主格を除き事態内に焦点を置く疑問詞が現れる必要がある。主格は多重焦点化制約により不適格とされる。

(10)*「私は、語ろうか」

(11)*「私は、なぜ / どうして / 語ろうか」

(12)「私は、何を / どこで / いつ / どのように / 語ろうか」

表13: 疑問化と人称制限2

基本類型	人称	形態
平叙文	1 2 3	スル (ノ)カ
	2 2 3	シタ (ノ)カ
推量文	1 2 3	スルダロウ カ
	1 2 3	シタダロウ カ
意志文	1 * *	シヨウ カ
	* * *	シマイ (、セヌ) カ
命令文	- - -	シロ -
	- - -	スルナ -

4 おわりに

疑問表現を話者の意志を中心にそれを特徴づける主体と主格補語とムードの性格について考察した。統語分析の枠組としての述部階層分析のモデルを拡張し主体と主題の三つ組で表現することを提案した。主体の意志は「疑い」の認識者として他動詞文脈では主格補語と密接な関係をもっている。自動詞文脈では顕在化されないため認識上のモデル提案することで扱えることを示した。

疑問の焦点化の潜在位置とその作用範囲を統語構造表示モデルにより示し、主体の意志と相関させることで、疑問表現を特徴づけた。そして、例証として人称制限、有題文、無題文との対応を情報の新旧(文脈上に導入されているかどうか)に関係して話者の意志をもとに基礎的な考察をおこなった。

疑問表現の分析では、「疑い」の対象は主体の意志と発話の態度に強く結び付いていることを指摘し、語用論上の認識的なモデルを提案した。疑問の焦点のあたる潜在位置は統語構造表示により示すことができる。これらの位置は統語分析で特定が可能である。すでに、単一化文法をもとに統語構造表示を扱う文法を開発している。この文法はICOTで開発されたPSI-II上で動作している。さらに、SUNワークステーション上での動作を確認している。

本稿では、疑問表現の分析が、統語構造表示により得られる情報と発話意図を扱うモデルによって扱えることを例証した。その範囲は基礎的な考察にとどまるが、計算機上での発話意図モデルの実装を進め評価結果を報告するつもりである。

疑問表現は、事態に関する不明箇所の解消の要求にとどまらない。本稿で考察したように、その意味は確認や同意、相手への非難など発話の前提に強く依存している。否定との関連が強く、提題項目を含む文では、否定辞と文末の助辞「か」の結び付きは修飾疑問を形成する。例証では前提の重要性を指摘したが、逆に応答文からの情報が重要

なふるまいをする場合も多い。疑問表現の分析はコミュニケーション上の機能や応答文の分析の含め、さらに多くの視点からの研究が必要である。

謝辞

本稿をまとめるにあたり有意義な議論をいただきました長澤陽子氏に深く感謝します。

参考文献

- [1] 尾上圭介. (1987), 「日本語の構文」, 『国文法講座 6, 時代と文法 - 現代語』山口明穂編集, 明治書院, 1987.
- [2] 鎌田修. (1988), 「日本語の伝達表現」, 『日本語学』, 9月号, VOL.7, 明治書院, 1988.
- [3] 森藤里美. (1989), 「日本語教育における疑問文・質問文 - コミュニケーション上の機能からみた日本語教材の課題 - 『日本語学』, 8月号, VOL.8, 明治書院, 1989.
- [4] 佐野洋. (1989), 「述部の階層分析と文脈情報」, 『談話理解モデルとその応用シンポジウム』, 情報処理学会 1989.
- [5] 佐野洋, 福本文代. (1989), 「疑問表現の統語制約」, 情報処理学会研究報告, 90-NL-75, 情報処理学会 1990.
- [6] 林万紀子. (1983), 「質問文の焦点を探る」, 『東京女子大学日本文学』, 第 60 号, 東京女子大学, 1983.
- [7] 廣瀬幸生. (1988), 「言語表現レベルと語法」, 『日本語学』, 9月号, VOL.7, 明治書院, 1988.
- [8] 田窪行則. (1987), 「統語構造と文脈情報」, 『日本語学』, 5月号, VOL.6, 明治書院, 1987.
- [9] 中右実. (1984), 「質疑応答の発想と論理」, 『日本語学』, 8月号, VOL.3, 明治書院, 1984.
- [10] 中田清一. (1984), 「疑問文のシンタクスと意味」, 『日本語学』, 4月号, VOL.3, 明治書院, 1984.
- [11] 仁田義雄. (1987), 『日本語疑問表現の諸相』, 『言語学の視界』, 大学書林, 1987.
- [12] 仁田義雄. (1989), 『行こうか戻ろうか - 意志表現の疑問化 -』, 『日本語学』, 8月号, VOL.8, 明治書院, 1989.
- [13] 益岡隆志, 田窪行則. (1989), 『基礎日本語文法』, くろしお出版 1989.
- [14] 南不二男. (1985), 『現代日本語の構造』, 大修館書店 1974.
- [15] 南不二男. (1985), 「質問文の構造」, 『文法と意味 (2)』水谷静夫編, 朝倉書店 1985.
- [16] 山口光. (1984), 「文型分類の原理」, 『日本語学』, 12月号, VOL.3, 明治書院, 1984.
- [17] 山梨正明. (1987), 「文脈と言語理解の諸相」, 『日本語学』, 5月号, VOL.6, 明治書院, 1987.
- [18] 矢野安剛. (1989), 「語用論的に見た疑問文」, 『日本語学』, 8月号, VOL.8, 明治書院, 1989.
- [19] 吉本啓. (1989), 「質問文の前提 (1) 前提の統語論的・運用論的解析」, 『談話理解モデルとその応用シンポジウム』, 情報処理学会 1989.